

「秒針の行方」

N高等学校
小林　凛太郎

表紙

祖父の店には、いつも、無数の秒針の音が、重なり合っていた。

壁いっぱいに並んだ、大小さまざまな時計。振り子時計、置き時計、腕時計。それぞれが、わずかに異なる速さで時を刻み、店の中に、複雑な、けれど、不思議と心地よいリズムを作り出していた。のぞみは、子どものころから、その音を、子守唄のように聞いて育った。

「時計はな、のぞみ。動いている間だけ、時間を信じさせてくれる道具なんだ」

祖父は、よく、そう言っていた。修理台に向かい、片目にルーペをはめて、小さな歯車と、にらめっこをしながら。

のぞみが、まだ小学生だったころ、学校帰りに、よく、この店に立ち寄った。ランドセルを下ろし、作業台の隅に座って、祖父の手つきを、飽きずに眺めていた。ピンセットの先で、米粒よりも小さなねじをつまみ、油をさし、微調整をくり返す。その一連の動きには、無駄がなく、まるで、儀式のような静けさがあった。

「時計の中には、小さな街があるんだよ」

祖父は、そう言って、分解した機械式時計の内部を、のぞみに見せてくれたことがある。歯車という歯車が、それぞれの役割を持って、規則正しく、回り続けている。その様子は、たしかに、小さな街が、休むことなく、時を刻みながら、動き続けているようにも見えた。

のぞみにとって、この店は、ただの修理店ではなかった。祖父という人間の、時間そのものが、静かに積み重なった場所だった。

祖父が亡くなったのは、二月の、まだ雪の残る朝だった。

長い間、患っていたわけではない。ある日、突然、店で倒れ、そのまま、意識を取り戻すことはなかった。あまりに急な別れに、のぞみは、しばらくの間、祖父がもういないという事実を、うまく受け止めることができなかった。葬儀の間も、店の前を通るたびも、心のどこかで、いつものように、扉を開ければ、祖父が、修理台に向かっているような、そんな気がしていた。

店は、あれから四か月、シャッターを下ろしたままになっている。母は、そろそろ、店じまいの手続きを進めようと言っていた。跡を継ぐ人間もいない、古い時計修理店を、いつまでも残しておくわけにはいかない、と。

のぞみには、母の言い分も、よくわかった。母自身、時計の修理については、ほとんど知らない。祖父一代で築いた、小さな個人商店を、これ以上、維持していくことは、現実的に、難しいのかもしれなかった。

のぞみは、その決定に、反対はしなかった。けれど、賛成も、できずにいた。

夏休みに入って、最初の日、のぞみは、久しぶりに、店の鍵を開けた。

ほこりをかぶった作業台。壁の時計たちは、当然、すべて、止まっている。何百もの秒針が、それぞれ、ばらばらの場所で、凍りついたように、動きを止めていた。その静けさは、

のぞみの記憶にある、あの店とは、まるで別の場所のように、感じられた。

子どものころ、あれほど心地よく感じていた店の空気が、今は、ただ、重たく、息苦しいものに、感じられる。のぞみは、しばらくの間、入り口に立ちつくしたまま、動けずにいた。

作業台の引き出しの奥に、のぞみは、見覚えのない、小さな懐中時計を見つけた。

金属の蓋には、精緻な唐草模様が彫られている。裏蓋を開けると、内側に、祖父の字で、小さく、日付が刻まれていた。今から一年前の日付。ちょうど、祖父が体調を崩し始めたころだった。

のぞみは、店の奥にある、祖父の作業日誌を、開いてみた。几帳面な字で、修理の記録が、びっしりと書きこまれている。最後のページには、こう書かれていた。

「例の懐中時計、脱進機の摩耗が激しい。部品を一から作る必要がある。時間はかかるが、必ず、直してみせる」

その先は、白紙だった。

依頼主の名前は、記されていなかった。だれの、何のための時計なのか、手がかりは、その懐中時計自体にしか、残されていなかった。

のぞみは、その懐中時計を、しばらく、手のひらの上で、転がしてみた。針は、十時十分を指したまま、止まっている。

ふと、小学生のころの記憶が、よみがえった。ある日、店の常連客が、祖父に、こう聞いていた。

「先生は、どうして、自分の時計を、作らないんですか」

「人の時計を直すだけで、精一杯なんですよ」

祖父は、そう答えて、少し困ったように笑っていた。あのときは、聞き流していた会話だったが、今、この懐中時計を手にして、その意味が、少し、違って感じられた。祖父にも、いつか完成させたい、自分自身のための時計が、あったのかもしれない。それを、後回しにし続けたまま、時間が、来てしまったのかもしれない。

修理の心得など、のぞみには、ほとんどない。それでも、なぜか、この時計を、このまま、放っておくことが、できない気がした。

のぞみは、作業台の椅子に座り、祖父が使っていたルーペを、手に取った。片目にはめると、視界が、ぐにゃりと歪む。祖父が、いつも、こうして、小さな世界に、没頭していたことを、のぞみは、改めて、思い知った。

その日から、のぞみは、毎日、店に通うようになった。

最初は、何をどうしていいかも、わからなかった。祖父の遺した工具箱を、一つ一つ開け

て、道具の名前と使い方を、専門書と、祖父の日誌を頼りに、独学で、覚えていった。
近所に住む、祖父の古い友人で、やはり時計職人だった、田村さんという老人が、時どき、様子を見に来てくれた。
「無茶なことを、やろうとしているな、のぞみちゃんは」
田村さんは、そう言いながらも、いやな顔ひとつせず、脱進機の仕組みや、歯車の調整のコツを、根気強く、教えてくれた。
「お前さんのじいさんも、若いころは、無茶ばかりしていたよ。見よう見まねで、独学で、この道に入った人だ。血は争えないもんだな」
のぞみは、その言葉に、少し、くすぐったいような気持ちになった。

夏休みの半ば、のぞみは、母に、店を続けたいと、切り出した。
「継ぐって、簡単なことじゃないのよ。学校もあるし、これから、大学のことだって、考えなきゃいけないのに」
母の言葉は、もっともだった。のぞみ自身、時計職人になりたいと、はっきり決めているわけではない。ただ、この、祖父が最後まで向き合っていた時計を、中途半端なまま、放り出したくない。その一心だった。
「卒業まで、時間はあるでしょう。その間だけでも、店を、このままにしておいてほしいの。この時計を、直し終えるまででいいから」
母は、しばらく、だまっていたが、やがて、小さく、うなずいた。
「一つだけ、約束して。ちゃんと、勉強もすること」
「わかってる」
その夜、母は、夕食の後片付けをしながら、ぽつりと、つぶやいた。
「お父さんね、本当は、あなたに、無理に継がせるつもりなんて、なかったと思う。ただ、あの人にとって、あの店は、生きがいそのものだったから」
のぞみは、母の言葉の奥にある、複雑な気持ちを、なんとなく、受け止めた気がした。

夏休みが明けて、学校が始まると、のぞみの生活は、一気に、忙しくなった。授業、部活、そして、放課後の、店での作業。友人の茜には、時どき、「最近、付き合い悪いね」と、からかわれた。
「なんか、面白いことでも見つけたの？」
ある日の昼休み、茜が、そう聞いてきた。のぞみは、少し迷ってから、懐中時計のことを、話してみた。
「おじいちゃんの、生きてた証、みたいなものだもんね。それを、直したいって思うの、わかる気がするよ」

茜の言葉に、のぞみは、少し、救われる思いがした。

脱進機の部品を、一から削り出す作業は、想像以上に、根気のいるものだった。何度も、寸法を間違え、何度も、やり直した。田村さんの指導のもと、のぞみは、少しずつ、少しずつ、部品の形を、整えていった。

旋盤の使い方も、最初は、まったくわからなかった。刃物を、材料に、どのくらいの角度で、どのくらいの力で当てるのか。わずかな加減の違いが、仕上がりを、大きく左右する。何個も、何個も、失敗作を積み重ねながら、のぞみは、手の感覚だけで、正確な寸法を、つかみ取れるようになっていった。

「最初のうちは、頭で考えすぎるんだ。手が、勝手に、覚えていくのを、待ってやらなきゃいけない」

田村さんの言葉は、ぶっきらぼうだったが、その端々に、長年、この仕事に向き合ってきた人だけが持つ、確かな重みが、感じられた。

「田村さんは、どうして、時計職人になったんですか」

ある日、作業の合間に、のぞみは、そう聞いてみた。

「若いころ、腕時計が壊れてな。直った時計が、前よりも正確に動くようになって、驚いたんだ。それ以来、すっかり、魅せられちまった」

田村さんは、少し照れくさそうに、笑った。

「お前さんのじいさんとは、同じ職業訓練校の同期でな。寡黙で、不器用なくらい真面目な男だったが、時計への情熱だけは、だれにも負けていなかったよ」

のぞみは、祖父の、知らなかった一面を、少しずつ、知っていくことに、不思議な喜びを、感じていた。

夜、家に帰ってからも、のぞみは、時計の構造についての本を、読みふけった。振り子の等時性、脱進機が刻む一定のリズム、ぜんまいが解けていく力を、正確な時の刻みに変換する、精緻な仕組み。知れば知るほど、のぞみは、時計という機械の、奥深さに、引きこまれていった。

祖父が、なぜ、あれほどまでに、この仕事に、心を注いでいたのか。のぞみは、ようやく、少しずつ、わかりかけている気がした。

九月に入り、新学期が始まっても、のぞみは、放課後、店に通う習慣を、変えなかった。削り出した部品を、幾度となく、組み込んでは、外し、調整しては、また、外した。田村さんが、「筋がいい」と、ぽつりと、つぶやいたのは、九月の終わりごろのことだった。

「あとは、根気だけだ。お前さんのじいさんに、負けないくらいの」

のぞみは、その言葉を、胸の奥に、大切にしまった。

十月に入り、進路希望調査の用紙が、学校で配られた。担任の先生に呼ばれ、進路面談が行われる日、のぞみは、まだ、何も、決められずにいた。

「時計の修理のこと、ちゃんと聞いたよ。すごいことだと思う。でも、それを仕事にするのか、趣味として続けるのか、そこは、ちゃんと、考えておいたほうがいい」

先生の言葉は、もっともだった。のぞみ自身、時計職人になると、はっきり決めているわけではない。

「まだ、決められません。でも、もう少し、時間をください」

のぞみは、そう答えるのが、精一杯だった。

その夜、店に立ち寄ると、田村さんが、いつものように、待っていた。進路のことを、ぽつりと打ち明けると、田村さんは、静かに、笑った。

「今すぐ、決める必要なんて、ないさ。お前さんのじいさんだって、回り道をしながら、少しずつ、この道を、見つけたんだ」

その言葉に、のぞみは、少しだけ、肩の力が抜けるのを感じた。

十月のある夕方、のぞみは、ついに、すべての部品を、組み上げ終えた。

ぜんまいを、ゆっくりと、巻いていく。指先に、金属の抵抗が、かすかに伝わってくる。

のぞみは、息を止めて、竜頭から、そっと、手を離した。

一瞬の静寂。

それから、かすかな、けれど、たしかな音が、聞こえてきた。

チ、チ、チ、チ。

秒針が、十時十分の位置から、静かに、動き出した。

のぞみは、しばらく、その音を、身じろぎもせずに、聞き続けていた。目のおくが、じんわりと、熱くなる。祖父が、最後まで、聞きたがっていたであろう、この音を、自分が、代わりに、聞いている。そのことが、なぜか、たまらなく、うれしかった。

その夜、のぞみは、田村さんに、動き出した懐中時計を、見せに行った。

「やったな。これは、たいしたものだ」

田村さんは、時計を、手に取り、しげしげと、ながめた。

「この時計、見覚えがある。たしか、お前さんのじいさんが、まだ若いころ、自分自身のために作った、最初の一台だったはずだ。修理の依頼品じゃない。じいさんの、原点だよ」

「おじいちゃんの……」

のぞみは、日誌に、依頼主の名前が書かれていなかった理由を、ようやく、理解した。祖

父は、だれかのためではなく、自分自身の、いちばん大切な時計を、最後の力を振りしぼって、直そうとしていたのだ。

のぞみは、懐中時計を、そっと、両手で包んだ。手のひらの中で、秒針の刻む、かすかな振動が、伝わってくる。

この店を、このまま、続けていけるかどうかは、まだ、わからない。時計職人になると、決めたわけでもない。それでも、のぞみは、もう、この店を、このまま閉じてしまうことは、できないと、はっきりと、思った。

壁に並んだ、たくさんの時計たちも、いつか、また、一つずつ、動かしていきたい。祖父が、生涯をかけて、守り続けてきた、あの、重なり合う秒針の音を、もう一度、この店に、取り戻すために。

翌日、のぞみは、母に、動き出した懐中時計を、見せに行った。母は、その音を、しばらく、じっと聞いていた。それから、静かに、目を潤ませた。

「お父さんの、原点だったのね」

「うん。田村さんが、教えてくれた」

「そう。……お母さんも、たまには、店に、顔を出そうかな」

母のその言葉に、のぞみは、うれしさが、じんわりと、胸に広がるのを感じた。

卒業までの、残りの日々。のぞみが、これから、どんな道を選ぶのかは、まだ、わからない。それでも、この一年で、のぞみは、一つだけ、確かなことを、見つけた気がした。

答えを、急いで出す必要はない。壊れたものと向き合い、時間をかけて、少しずつ、直していく。そのことの中にこそ、大切な何かが、宿っているのだということを。

のぞみは、懐中時計を、そっと、上着のポケットにしまい、店のシャッターを、開けた。

夕暮れの光が、静まりかえった店の中に、ゆっくりと、差しこんでいった。

壁に並んだ、止まったままの時計たちが、その光を浴びて、静かに、輝いていた。のぞみは、その一つ一つに、そっと、目をやった。

（一つずつ、また、動かしていこう）

そう心に決めて、のぞみは、次の作業に取りかかるべく、作業台の椅子に、腰を下ろした。

窓の外から、かすかに、夏の終わりを告げる、虫の声が、聞こえてきた。